

フットワーク・チームワーク・ネットワーク

7月12日に、第1回高等学校特別支援教育連絡会が開催されました。今年で3年目を迎える本連絡会には、中高連携についての話し合いを深めることができると考え、地域の中学校の上級特別支援教育コーディネーターも参加し、活発な情報交換をすることができました。



1 各校の状況について

	特別支援Co	校内委員会実施回数	外部機関との連携	職員研修予定
A高校	1名	毎月	高等学校支援隊・SC	2月
B高校	2名	5回/年	高等学校支援隊・SC	7月
C高校	4名	1回	SSW	未定
D高校	2名	3回/年		11月
E高校	1名	未定	SC	未定

2 情報交換から

- ・校内支援体制としては、定期的な委員会を開催するというよりは、突発的な事態が生じたときなどに、主に学年部が中心となって支援にあたる学校が多い。
- ・明確に要支援とまではいたらずとも、グレーゾーンの生徒に対する対応に苦慮している学校が多い。
→中学校からの申し送りも少なく、高等学校には、特別支援の視点からの学習面、生活面に関する指導スキルが足りないという意見も聞かれた。
- ・生徒同士のトラブルはそれほど多くないが、進路指導において、保護者が障害をオープンにしていない場合の対応に悩むケースも見られる。

3 協議

(1) 進路指導について

- ・通常の高校では、障害を受容できない保護者も見られます。「障害の受容」と「自己理解」が、その後の人生にも関わるため、高校入学をゴールとして考えるのではなく将来を見据えて解決すべき課題であると意見交換がされました。



- ・中学校時の進路指導がとても重要になる。中学校段階で、高校卒業後の進路に関する情報を、保護者にも具体的に伝える必要がある。その上で、本人・保護者が納得するように進路を検討してほしい。
- ・障害が診断されても、生きにくさは変わらない。目を向けるところは、その生徒が困っていること。そのケースに応じて保護者と相談を積み重ねることが大切。

(2) 研修会について

- ・平成30年度から通級指導教室が高等学校においても設置されます。参加者からは、グレーゾーンの生徒が増えてきているように感じるとの声も複数聞かれました。また、職員の障害や特性の理解度は様々だとの状況もありました。ニーズに応じた職員研修を実施し、個々の専門性を向上させることで、生徒の困り感を把握し、適切な支援をすることができるようにつなげていきたいと話されました。



<中学校特別支援教育上級コーディネーターから>

- ・高等学校の実情を知ることができて良かった。中学校と高等学校の引継ぎの在り方についてもまだまだ課題があることが分かった。高校に合格するための学習指導以外に、生活面における中学校でできる指導内容について考えていきたい。

高等学校における周囲の生徒の障害理解を深めていく取り組みの一つとして、地域の高等学校におけるボランティア養成講座の活用が年々増えてきています。引き続きこのような取組も大切にしながら、地域の学校同士、年間を通じて継続した連携を積み重ねていくことを確認しました。